様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月 ２９ 日現在

機関番号：３０１２２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１１７２５

研究課題名（和文）ダウン症のある女子の母親が行う初経教育の構築

研究課題名（英文）Building of the menarche education a female mother does with Down's syndrome

研究代表者
伊織　光恵（iori, mitsue）

天使大学・看護栄養学部・助教

研究者番号：４０７３６２８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：ダウン症候群のある女子の母親20人のインタビュー結果から初経教育プログラムを作成・実施・評価を明らかにすることを目的とした。初経教育プログラムは、子どもの理解に合わせたナプキン交換の説明、日常生活での人付き合いのルール、社会性が低いために起こる問題への予防方法、周囲への理解と協力の要請であった。評価は、6の大カテゴリー、16のカテゴリーが抽出された。

研究成果の概要（英文）：Menarche educational program was made from an interview result of 20 female mothers with Down's syndrome and it was put into effect, and had for the object to make the value clear. Menarche educational program was prevention method, understanding to the neighborhood and a request of cooperation to the problem which happens because a rule of sociability and the sociality by the explanation and daily life of the napkin exchange added to child's understanding were low. A big category of 6 and a category of 16 were picked out for evaluation.

研究分野：看護

キーワード：ダウン症候群　女子　初経教育　母親　初経教育プログラム

1. 研究の背景

近年、日本では障害児・者の人数は増加傾向にあり、障害の重度化、重複化が問題になっている。1979 年以前、障害児は就学猶予就学免除の措置が取られたこともあったが現在は義務教育化されており、2007 年 4 月からは児童生徒の障害の重複化に対応した適切な教育を行うため特別支援教育が開始されている。戦後、日本における性教育は純潔教育であり、女子のみの初経教育が中心であった。その後、全人的なセクシャリティ教育として新しい性教育の在り方が議論され、1999 年文部省（当時）により初めて性教育について「学校における性教育の考え方、進め方」が示されたが、特別支援学級の学習指導要領の中に性教育の位置づけがされておらず、学校や教員にその対応は任されている。

ダウン症候群のある女子の初経年齢は、12 歳でほぼ全国平均と同様であり、生活上の問題として思春期には「性」の問題がある。母親は「性」について悩みを持ち、性的被害・加害を最も問題にしており、女子本人への性教育が必要であると考えている。学校での性教育の一つに初経教育があるが、子どもの成長・発達の個人差が大きいことや教諭の知識不足や多忙を理由に十分に行われていない。そのため母親は初経教育への必要性を感じ、自らが教育したいと考えるが教育内容や方法がわからずにいる。母親は女子に初経教育を行うために母親自身の学ぶ機会を希望しているが、母親が参加できる学習会の開催など十分に対応できていない状況である。障害により成長・発達に個別性があり、女子の一番傍で成長・発達を見守り、状況がわかる母親が性教育を行うことは女子にとっても良いことと考えられる。しかし、母親の参加できる学習会が少ないだけではなく、性に関する内容はプライベートなものであり情報が得にくい状況である。知的障害のある女子の母親が実施した初経教育についての研究は極めて少なく実施内容や方法も明らかにされていない。母親は女子に行う初経教育を自らが集団形式の学習会で学び、他の母親たちの話も聞きたいと考えていた。障害のある子どもの母親は養育にストレスを強く感じ、自己効力感が低い一方、同じ立場の他の母親たちとの交流によりストレスの低下やセルフヘルプを得られることが報告されている。このように、知的障害のある女子の母親が初経教育を学ぶ機会やシステムも確立されていない状況であり、親が子どもに初経教育を伝えるプログラムの作成は必要であると考える。

2. 研究目的

ダウン症候群のある女子の母親で、これから初経教育を行う母親とすでに初経教育を行った母親のインタビュー結果から初経教育プログラムを作成・実施・評価する。

3. 研究の方法

(1)第一段階

ダウン症候群のある女子の母親がこれから行おうと考える初経教育と母親の不安や悩みを明らかにすることを目的にインタビューを行う。研究対象者の、母親の選定条件は、10 名程度で以下のａ.ｂの両者をみたす者とした。a.年齢は 30～50 歳代、ｂ.下記の子どもの選定条件①～④の全てを含む子どもを有し、「まだ初経教育を行っていないこと」である。子どもの選定条件は、①年齢は 8 才～18 才（小学校 3 年生から高校生）、②ダウン症候群で療育手帳を有する、③続柄は長女で同胞の有無は問わない、④初経の有無は問わない、である。

(2)第二段階

ダウン症候群のある女子の母親がすでに行った初経発来前と発来後の初経教育とそれに伴う不安や悩みを明らかにすることを目的にインタビューを行う。研究対象者の、母親の選定条件は、10 名程度で以下のａ.ｂの両者をみたす者とした。a.年齢は 30～50 歳代、ｂ.下記の子どもの選定条件①～④の全てを含む子どもを有し、「すでに初経教育を行っていること」である。子どもの選定条件は、①年齢は 8 才～18 才（小学校 3 年生から高校生）、②ダウン症候群で療育手帳を有する、③続柄は長女で同胞の有無は問わない、④初経の有無は問わない、である。

(3)第三段階

第一段階と第二段階で出た結果から初経教育プログラムを作成・実施・評価する。研究対象者の、母親の選定条件は、10 名程度で以下のａ.ｂの両者をみたす者とした。a.年齢は 30～50 歳代、ｂ.下記の子どもの選定条件①～④の全てを含む子どもを有し、「これから初経教育を行おうと考えており研究者による初経教育プログラムに参加できること」である。子どもの選定条件は、①年齢は 8 才～18 才（小学校 3 年生から高校生）、②ダウン症候群で療育手帳を有する、③続柄は長女で同胞の有無は問わない、④初経の有無は問わない、である。

1) 初経教育プログラムの実施と評価の手順

初経教育プログラムは、集団のセッション 1 とセッション 2、及び個別のセッション 3 で構成した。セッション 1 を開催 2 か月後にセッション 2 を、さらに 2 か月後にセッション 3 を開催した。初経教育プログラムの実施と評価の手順は、セッション 1 の直前に評価 1、そしてセッション 1 の直後に評価 2 を行った。そして 2 か月の期間を開けセッション 2 とその直後の評価 3、そして 2 か月後のセッション 3 と直後の評価 4 の実施となった。

2)プログラムの内容

母親自身が自己効力感を高めるためには、母親が実際に有している知識・技能・規範をどの様に活用していけるかを査定し確認できるように援助する必要があった。そのためには画一的な知識・技術を伝達するのみではなく、ダウン症候群のある女子が必要とする内容を理解できるように具体的に提示していった。初経教育プログラムは、第一段階と第二段階の結果により明らかになった内容を基に、研究者が作成した。 子どもの理解に合わせたナプキン交換の説明は、まず① 母親のやり方を見せる、②機会を捉えて娘に行わせる、③繰り返し練習することであった。日常生活での人付き合いのルールとして、①日常生活の中で知らない人について行かないように繰り返し言い聞かせる、②異性と接近しないような付き合い方を教える、③安否を確認できるための家族との約束であった。社会性が低いために起こる問題への予防方法は、①母親がナプキンや服装の選択を行う、②経血で汚れないためにナプキン交換を促すであった。周囲への理解と協力の要請は、①学校生活で月経の対応を担任教諭と養護教諭に依頼する、②娘には事前に月経で困ったときの相談相手を教えることであった。

セッション 1 とセッション 2 では、母親自身が集団学習を希望していることやプログラム内容に自己効力感の 4 つの情報源の体験を加え効果を期待するため集団学習にて行った。セッション 1 では、初対面のダウン症候群のある女子を養育する母親たちが一緒に学びながら交流を深め自己効力感を高められる場を

主体的に作っていけるように支援した。導入はオリエンテーションから始め、次に、ダウン症候群のある女子にこれから初経教育を行おうと考える母親、ダウン症候群のある女子にすでに初経教育を行った母親のインタビューで明らかになった結果を基本とした具体的内容を紹介していった。内容はすでに初経教育を行った母親が実施した内容と方法、それらに関する準備・工夫、行った時の女子の反応と母親の気持ちなど、他の母親の初経教育の成功例と失敗例とした。さらに、実際に女子が月経になった時の反応や母親の対応などであった。また母親が、どの様な悩みや不安がありどの様に解消していったのかについて伝えることとした。女子の障害の程度、知識や技術の差が大きいため、母親が女子への教育内容を選択できるように、研究者は母親が女子の興味、理解度、教える時期などを判断し選択できることを考慮し準備を行った。

セッション 2 では初経教育への母親自身の行動や気持ちの変化を表出する場とした。家庭での実施内容や母親の行動や気持ちの報告をした。他の母親と疑問などを話し合い、自己目標の達成状況を評価した。過去に女子からあった性に関する質問や対応に困った事など、自分と同じ状況の母親同士の話し合いの場を作り意見交換することで、母親同士の交流を深め初経教育に関する情報交換の場とした。

セッション 3 では知的障害のある女子の成長・発達の個人差があることや初経教育が性に関するデリケートな内容であることから個別学習の形で設定した。ここでは集団学習では表出しづらい内容や個別性のある疑問・質問について研究者と共に考え対応していく場とした。

3) 初経教育プログラムに関する評価

自記式質問紙法によりプログラム開始前に評価 1、セッション１終了後に評価 2、セッション 2 終了後に評価 3、セッション 3 終了後に評価 4 を行った。そして、評価 4 ではインタビューも行った。

評価 1：対象者の属性は事前調査票で、自己効力感は坂野らの一般的自己効力感尺度（16 項目）で、そして養育スキルは渡邉らの養育スキル尺度で測定した。

評価 2 ：セッション 1 のプログラム満足度を日本語版 Client Satisfaction Questionnaire 8 項目（以下 CSQ-8J）を使用し評価した。

評価 3：セッション 2 のプログラム満足度を日本語版 Client Satisfaction Questionnaire 8 項目（以下 CSQ-8J）を使用し評価した。

評価 4：自己効力感は一般的自己効力感尺度（16 項目）により、養育スキルは養育スキル尺度で測定を行いプログラム実施前後で変化を評価した。そして、プログラム満足度を日本語版 Client Satisfaction Questionnaire 8 項目（以下 CSQ-8J）を使用し評価した。最後にインタビューを行いプログラムに対する総合評価を行った。

4. 研究成果

(1)第一段階

ダウン症候群のある女子の母親がこれから行おうと考える初経教育と不安や悩みは、13 のカテゴリー、45 のサブカテゴリー、192 のコードが抽出された。【娘に初経が発来する可能性への気づき】【母親の義務と考えるが教え方に迷う初経教育】【娘の初経教育を始める時期の想定】【娘の理解度や興味に合わせた初経教育を想定】【娘の初経教育開始に

向けて求める情報収集の相手】【娘が月経を受け入れやすいように準備してのぞむ初経教育】【母親が自分の月経を見せて教える初経教育】【初経教育についての娘の理解を案じる】【羞恥心の足りない娘の行いをさとす周囲の人と愛おしむ家族】【娘の月経時の対応を考え女性担任教諭の希望】【教諭に依頼する排泄と初経発来への対応】【娘が性暴力被害にあうことを考えての不安と見守り】【娘の将来への希望と不安】であった。

(2)第二段階

ダウン症候群のある女子の母親がすでに行った初経教育と不安と悩みは、13 のカテゴリー、41 のサブカテゴリー、197 のコードが抽出された。カテゴリーは初経発来の前後で大別され、初経発来前は、【娘の初経発来を案じての準備】【娘の理解力により決める初経の情報提供の量と内容】【娘に行う機会を捉えたナプキン交換の体験学習】、そして初経発来後は、【娘の初経初来時に教える経血への対応と相談相手】【娘の初経初来への相反する喜び】【娘のナプキン交換自立への期待と心配】【娘が経血で汚れないためのナプキンや衣類の選択】【教諭に行う娘の月経に関する情報提供と依頼】【娘の月経による体調不良への対応】【娘の初経準備を振り返っての評価】【今後、娘に行う性教育内容の判断】【娘が性暴力被害にあう可能性への不安と対応】【娘の将来への希望と諦め】であった。

(3)第三段階

1)自己効力感の変化：評価 1 と評価 4 で測定した母親の一般自己効力感尺度の得点変化は、評価 1 では 1 ～12 点、評価 4 では 2～10 点と事例により得点に幅のある結果であった。また、評価 1 から評価 4 の得点変化は増加が 4 名、変化なしが 2 名、減少が 3 名であった。

2)養育スキルの変化：評価 1 と評価 4 で測定した母親の養育スキルの得点変化は、評価 1 と評価 4 の「養育スキル全体」と、下位尺度である「道徳性スキル」「自尊心スキル」「理解・関心スキル」を求めた。そして評価 1 と評価 4 の点数変化を比べると「養育スキル全体」は、増加が 3 名で減少が 6 名、下位尺度の「道徳性スキル」は、増加が 4 名で減少が 5 名、「自尊心スキル」は増加が 6 名で減少が 3 名、「理解・関心スキル」は増加が 2 名で減少が 6 名、変化なしが 1 名だった。

3)初経教育プログラムに対する満足感：評価 2、評価 3、評価 4 で測定した母親の CSQ-8J は各セッションの総得点の集計では、セッション 1 は 21～31 点、セッション 2 は 19～30 点、セッション 3 は 20～31 点と得点に幅があった。

4)初経教育プログラムの運営評価

①初経教育プログラムの学習形態：セッション 1、セッション 2 の集団学習での情報交換は全員が良かったと述べた。理由は、他の母親の気持ちや行動を聞き、悩んでいるのは自分だけではないことを知り、初経教育が自分にもできる可能性を感じ、実践する意識が高まったことであった。

②初経教育プログラムの学習期間：プログラムは、毎月では日程調整も難しいが、学校行事と日程調整ができて参加しやすく、集いの間隔や時期的に日程調整がしやすいと述べた。また、次の集いまでの 2 か月間は、早く他の母親の話が聞きたいと思い、自分も次に話す話題を準備するなど、参加を心待ちにしている状況があった。

③初経教育プログラムの評価方法：初経教育プログラムの実施に当たり、一般自己効力効果尺度、養育スキル尺度、CSQ-8J の 3 種類の

アンケートをそれぞれ複数回実施した。養育スキルのアンケートでは、子育てに必要な内容が質問されており、自分は養育スキルを十分に行っていないと述べた。また同じアンケートへの複数回の回答は、自分自身を客観的に見て評価することで変化を感じる機会となったと述べた。

④初経教育プログラムの改善点：個人的に質問や相談が出来る時間の延長の希望があった。セッション 3 では、インタビュー以外に個別に話す時間を設定したが、セッション 1、セッション 2 の集団学習では質問しにくい内容もあり、それぞれに短時間でも個別に話せる時間が欲しかったと述べた。また、開催時間は 1 回を 2 時間としたが、3 時間の設定で、もっとゆっくり時間を過ごしたかったと希望があった。

5）初経教育プログラムに対する総合評価

初経教育プログラムに参加したダウン症候群のある女子の母親の評価は、『初経教育の情報から得た安心感とやる気』『初経教育プログラムの肯定的評価と方法の再考』『母親が娘を評価しながら実践した初経教育』『周囲の人へ働きかけた協力の依頼』『娘が羞恥心と人との付き合い方を理解することを期待』『娘の成長を感じられた喜びと強まる不安』の 6 の大カテゴリーとなり、16 のカテゴリー、42 のサブカテゴリー、152 のコードが抽出された。

5.　主な発表論文等

[雑誌論文]（計 1 件）

①伊織　光恵、ダウン症候群のある女子をもつ母親が行う初経教育、札幌保健科学雑誌、査読有、第 4 号、2015、17-27

6.　研究組織

(1)研究代表者

伊織　光恵（IORI,　Mitsue）
天使大学・看護栄養学部・助教
研究者番号：40736287

(2)研究分担者

今野　美紀（KONNO, Miki）
札幌医科大学・保健医療学部・教授
研究者番号：00264531